

木造弘法大師坐像



〔登録年月日〕平成一四年二月一三日
〔種別〕有形文化財（彫刻）
〔名称〕木造弘法大師坐像
〔点数〕一軀
〔所有者等〕文殊院
〔所在地等〕和泉四一八―一七

有形文化財（彫刻）

木造弘法大師坐像

本像は文殊院の本尊で、像高九〇cm、膝張八〇cmの寄木造りで玉眼を眼入している。

像容は典型的な弘法大師像で、頭部は円頂、右手を胸前に挙げて五鈷杵を執り、左手を左膝の上に置いて数珠を持って安坐している。納衣をゆったりと身につけて膝を覆い左右に拡げているが、膝前の衣の部分は別木と思われる。

元禄年間（一六八八〜一七〇四）に高野山から移されたという伝承がある本像は、面貌、法衣、袈裟の衣文の表出に特徴がみられる。特に面貌の表情は、鼻筋がとおり、顎が力強く張り、両目は正面を見据えるなど、写実的で迫力があり、堂々たる風格を備えている。衣文は深く刻まれて流麗な線をなし、両手の指の細部に至るまで神経が注がれていて、一般的な弘法大師像には見られない、作者の創作的、造形的な手腕がうかがえる。

総じて、一般的な弘法大師像の形式にとらわれることなく、大師の内面を表現しようとする作者の意欲が感じられ、彫刻の技法も洗練された格調の高い作風が示されている。

本像の作者や造像の由来を知る手がかりはないが、作風から見て室町時代と考えられ、同時代の肖像彫刻としても優秀な作品である。

本像はその格調の高さから、弘法大師像としてのみならず、肖像彫刻としても美術的に優れており、文殊院の歴史を知る

上でも貴重な作品である。

【文化財所在地】

